

短期海外研修プログラムにおける参加者の「学び」

-その意義と長期留学への期待-

流通科学大学サービス産業学部教授 中川 典子

NAKAGAWA Noriko

1. はじめに

近年、マスメディア等により、日本から海外に留学する学生数の減少が指摘されている。日米教育委員会の報告書によると、米国への日本人留学生数は、1994年から1997年にかけては国別で第1位を占めていたが、それ以降は下降の一途をたどり、現在は第7位となっている（日米教育委員会、2012）。一方、日本からアメリカへの留学生数は全体としては減少傾向にあるものの、学位取得以外の目的で留学する日本人の数は、むしろ増加傾向にあるとの報告がある（木村、2011）。また、日本の約7割の大学が語学研修やインターンシップを実施しているとの報告もあり（横田、白土、坪井、太田、工藤、2006）、現在も日本の多くの高等教育機関による海外研修プログラムの実施が重視されている事実には変わりはない。

流通科学大学では長年に渡り、米国夏季語学研修プログラムを実施してきた。2007年度には、新たに提携校となったオレゴン州のポートランド州立大学(PSU)で第1回目の海外研修が実施され、総勢20名の学生が参加した。本稿では、佐伯の「『学ぶ』ということの意味」（1995）の中で指摘された学びの主要概念を適用し、参加者が研修を通じて獲得した「学び」を探索することにより、短期海外研修プログラムの意義を考察する。次節では、まず、佐伯の学びの概念を概観し、短期海外研修プログラムの中でそれらがどのように位置づけられるのかを考察する。その後、2007年度の研修参加者に実施した調査結果を分析することにより、研修が参加者にもたらした学びについて検討する¹。そして、調査から得られた結果をもとに、筆者が考える長期留学への期待についても述べたい。

2. 「学ぶ」ということの意味

佐伯（1995）は、「学び」を「自分探しの旅」、「共同体としての学び」、「社会的自我の形成」という3つの鍵概念をもとに論じている。彼は、ワロンの自我発達論に基づき、「赤ちゃんが『自分』というものを意識しはじめることと、『他人』というものの存在を意識し始めることが、いわば同時に発生し、相互に関わりながら発達していく」（p. 49）と述べている。これは、発達の初期段階では、自分と離れた他者の人格を発見し、自分とは異なる存在の他者が自分の外側から自分に働きかけてくることを理解し、自分自身の感受性の内部に、「他者」という存在に「なってみる」ことのできる「もう一人の自分」（第二の自我）が作り出されることを意味している。さらに成長が進むと、子供の第二の自我に益々多くの現実の他者が取り込まれ、親しい仲間との議論や意見交換を通じて、自分の学びの中にさまざまな観点を取り込む形で「共同体としての学び」の段階へと進んでいく。着目すべき点は、佐伯がこのような「学び」

を万人にとっての最も人間的な営みであるとし、「自分探しの旅」と位置づけていることである。

やがて、上記のプロセスを経て、集団活動への参加が発展していくにつれ、不特定多数の「よそ人」たちの間で、しっかりと通用する「社会的な」他者を自分の中に形成し、客観的に認識しつつ、あらゆる吟味や批判に耐えるように反省することができるようになる。この段階の自我が「社会的自我」である。この段階で、人は自らを社会的かつ公共的な集団の一員と見なし、自分たちが歴史ある独自の制度のもとに置かれていることを認識し、その中で存在する権利や義務を自覚し、それらを改善する可能性を探ることになる。人は、このようにして自我をさらに外へと押し出し、他人や他の文化的集団に照らして自分だけでなく、自らが所属する共同体や社会の正当性、妥当性を理解するようになる。佐伯は、このことを説明するにあたり、「学びの段階としては、他の領域と交流して、これまでじぶんの学びを形成してきた制度や慣習を反省的にとらえなおし、暗黙の前提とされていたこと、無意識のうちに入り込んでいた枠組み自体を、たんなる歴史的・制度的所産として相対比して吟味し、学びの共同体をいっそう拡大していく営みに従事することと対応している」(p. 58)と述べている。

3. 「学び」と海外研修プログラムとの関連性

さて、上記の「自分探しの旅」、「共同体としての学び」、「社会的自我の形成」という「学び」の概念は、短期海外研修プログラムにおける参加者の学びにどのように関連づけられるだろうか。

佐伯は、まず、「学び」というのは基本的に「学びがいのある世界を求めて少しずつ経験の世界をひろげていく自分探しの旅」であるとしている (p. 48)。文化とはある意味、我々の意識外に存在するため、生まれ育った環境の中に留まっているだけでは、自文化について客観視する機会を持つことは困難である。この点、短期海外研修プログラムは語学や異文化について学ぶ機会を与えるだけでなく、言葉を自由に使えない環境の中、慣れない生活様式に適応しようとするプロセスの中で、自文化や過去の自分自身のあり方を振り返る機会を与えてくれる。参加者たちは、自文化とは異なる制度や慣習に基づき機能する異文化に身を置くことにより、無意識のうちに身につけてきた自文化という枠組み自体を客観視する機会を得る。それが、ひいては、「自分とは何か」、「日本人とは何か」といった自己アイデンティティ、あるいは、文化的アイデンティティについて探索する機会となる。これは佐伯が提唱する「学び＝自分探しの旅」に通じる考え方である。

また、このことは他者との相互交流、すなわち、コミュニケーションの実践によってこそ実現が可能となる。我々は親しい仲間との議論や意見交換を通じて、他者の多様な視点を自分の中に取り入れることで「共同体としての学び」を実現していくと考えられるが、短期海外研修プログラムもこの「共同体としての学び」を実践する絶好の機会となりえる。流通科学大学の海外語学研修は、卒業単位を取得できる授業科目として位置づけられ、2007年度時点では事前研修、現地研修および事後研修から構成されていた²。短期海外プログラムと大学の他の授業との大きな違いは、事前・事後研修では、ゼミ以外の通常の多くの授業に見られるような個人作業を中心に進められるのではなく、参加者たちがチームワークおよび、団体行動の重要性を自覚し、自ら

行動を律しながら、集団行動を遂行することが授業の主眼となる。また、これが、現地での充実した研修と参加者の安全へとつながり、研修そのものを成功に導く鍵となる。

流通科学大学では、事前・事後研修の中で参加者たちが共同作業を行う数多くの機会が設けられている。例えば、事前研修ではグループ討議や出発前の1泊合宿など、参加者間の親睦やチームワークを促進する内容が盛り込まれており、帰国後の事後研修では大学祭での展示発表および研修冊子の共同制作などの課題が課せられる。ここで、参加者たちは個々人の視点の多様性を知り、自らの視野を広げる機会を得ることになる。その結果、「もう一人の自分」（第二の自我）を獲得することになり、このような一連のプロセスを通して「共同体としての学び」が実現する。また、佐伯の理論では、第二の自我を求める気持ちは万人に通じるものであり、この「なつてみたい、もうひとりの私」を実現するために学び手が出会う「師」としての他者が存在することの重要性が指摘されている。研修の指導教員、他の参加者、現地研修に関わる人々（大学スタッフやホストファミリー）など、海外研修に関わるすべての人々は、参加者にとっての学びの「師」に匹敵する存在であると考えられる。

最後に、自我は孤立して存在するものではなく、常に他の人間との関係において社会的に存在しており、短期海外研修は参加者に「社会的自我の形成」の機会を与える可能性を秘めている。異文化に生きる人々の生活習慣や価値観と出会い、自文化のルールが万人にとっての普遍的ルールではないこと、異なった文化にはその文化特有の文化的規範が存在し、人々が各々所属文化の規範に従って行動することは正当であり、妥当であることを、研修の参加者らは現地研修を通じて認識する機会を得ることになる。

4. 参加者プロフィールと研修プログラムの概要

研修の参加者は男子4名、女子16名（1回生と4回生、各1名、2回生と3回生、各9名）であった。事前研修で実施した渡航前アンケートの結果、12名については3日～2週間の海外渡航経験があった。事前研修は、研修参加者決定後の2007年5月16日から7月4日までの計8回実施され、各回は90分の授業時間枠内で実施された。内容は、渡航前アンケート、参加メンバーによる英語の自己紹介、旅行業者による事務手続きに関する説明、ホストファミリー決定の資料となる英文の参加者プロフィール作成、研修参加目的と現地での心得に関するグループ討議、入国時や現地研修で役立つ英語表現の学習、そして、ホームステイを題材にしたビデオを見ながら、アメリカ人の生活様式について学ぶ「文化特定」学習、「文化一般」学習の一環として実施した異文化シミュレーションで構成された。工藤（2011）は、短期海外研修プログラムにおける教育的効果のプロセスの中で、「緩衝行動」の重要性を指摘しているが、事前研修では、現地で困難に遭遇した際の問題解決のヒントを与える目的で、クリティカル・インシデント³を用いたグループディスカッションを実施した。上記の他、参加者間の親睦をはかる目的で、大学近隣のセミナーハウスで1泊2日の合宿を実施した。現地研修は、2007年8月27日から9月18日までの23日間実施された。研修先のPSUのInternational Educational Program Officeにより作成された流通科学大学向け海外研修プログラムを通じて、参加学生らは週末を除く5日間、午前中3時間は英語の

授業、午後3～5時間はアメリカ文化に関する授業やフィールドワークを体験した。週末については、参加者らは各々のホストファミリーと共に過ごした。帰国後の事後研修は、2007年9月26日から12月12日までの計12回実施された。事後研修の主な目的は、研修成果の報告であり、10月に開催される大学祭での展示物および研修記念冊子の作成が主な授業内容であった。

5. 調査対象者と調査方法

渡米前アンケートでは、参加目的を尋ねる質問に対し、研修参加者全員が積極的かつ肯定的な内容を記入していたが、帰国後の事後研修の際に参加者から得た研修に対する感想や、参加者らが研修記念冊子に執筆したエッセイの内容を分析した結果、実際には出発間際まで渡米を迷っていたものや、必ずしも自らの意志で参加したわけではなかったものなど、彼らの本音を垣間見ることができた。そこで、一貫して積極的な参加姿勢を示していた参加者と当初は参加に消極的であった参加者、各4名の協力を得て、インタビュー調査を実施し、彼らに生じた学びを探索することにした。今回の調査で使用した方法は、個人別に態度構造を測定するために開発されたPAC分析(Personal Attitude Construct)⁴(内藤、2001)である。インタビューでは、「米国夏季語学研修を振り返って、今回の研修はあなたにとって、どのような意味をもつものでしたか。何らかの気づきや発見はありましたか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。頭に浮かばなくなるまで、自由に連想して書いてください。」という教示を与えた。調査は2007年11月末から翌年の1月にかけて、筆者の研究室で行われた。インタビューに要した時間は1名につき1～1.5時間であった。インタビュー内容は協力者の許可を得て録音された。

本稿では、2段階の手続きを踏むことにより、研修参加者の学びを探索する。まず、PAC分析の手順の中で、調査協力者が記入した各カードを佐伯(1995)の3つの概念に基づき分類し、調査対象者全体から浮かび上がった学びの内容を検討する。次に、終始、積極的参加意思を示していた参加者と当初は消極的参加であった参加者、各1名のクラスター分析の結果を示し、各自にいかなる学びが生じたのかを考察する。

6. 調査協力者全体から浮かびあがった「学び」の様相

8名の協力者により記入されたカードの総数は90枚であった。分析に先立ち、まず、8名に実施したインタビュー内容のテープ起こしを行った。続いて、各カードに書かれた内容を単なる言葉の意味として解釈するのではなく、どのような意味を込めて参加者が書いたのかを、インタビュー内容を書き起こした原稿を吟味しながら、佐伯の概念と関連があると思われるカードを選抜し、分類化を行った。ここでは、(1)研修中や研修後に起こった自分の感情、態度、行動に関する変化について書かれた内容、あるいは、自分自身あるいは日本文化に関する発見や再確認した内容が書かれたものについては「自分探しの旅」、(2)他の参加者や指導教員、現地で出会った人たちとの相互交流を通じて、認識し学んだ事柄について書かれたものについては「共同体としての学び」、(3)日本と米国との文化習慣の違い、あるいは、米国に対するイメージが書かれたものについては「社会的自我の形成」として分類した⁵(表1)。

表1 調査協力者のカード内容の分類化

協力者	「自分探しの旅」	「共同体としての学び」	「社会的自我の形成」
A (13/15)	緊張 (+)、満足感 (+)、適応 (+)、受け入れ (-)、違い (0)	笑顔 (+)、出会い (+)、善意 (+)、ホスピタリティ (+)	スケールの違い (+)、文化 (+)、新鮮 (+)、未知 (+)、興味 (+)
B (10/10)	積極性 (+)、新しいことに対する挑戦 (+)、探究心 (+)、日本の良さ (+)	言葉は通じなくても気持ちは伝わる (+)、語学力の大切さ (+)、コミュニケーションの大切さ (+)、外国人とのコミュニケーションの楽しさ (+)、家族の大切さ (+)	環境の違い (-)
C (7/7)	成長 (+)、辛抱して続けていけば、必ず良い結果になって表れる (+)、不安があっても一歩前に踏み出すことの大切さ (+)	サポートしてくれた先生、スタッフ、ホストファミリー、両親に伝えたい言葉 (+)、思いやり、協力しあう、チームワーク (+)、辛くても苦しい時でも必ず支えてくれる人がいる、自分は多くの人に支えられて生きている (+)	文化・習慣の違い (+)
D (11/11)		人に優しい (+)、努力家 (+)、人生を楽しんでいる (+)、フレンドリー (+)、愛国心 (+)、はっきり意見を言う (+)、家族のつながり (+)、夢を持っている (+)、全ての出会いやつながりを大切にする (+)	壮大 (+)、自由 (+)
E (14/15)	自分を成長させる (+)、自信がつく (+)、行くまでは英語を勉強したくないと思っていたけれど、帰ってきてからもっと英語を身につけたいと思うようになった (+)、日本人は小さなことにこだわり過ぎる (-)	No, pain, no gain という諺を学んだ (+)、アメリカ人はフレンドリー (+)、アメリカ人は寛大 (+)、アメリカ人はルーズ (-)	路面電車で改札がない (+)、シャワーが壁に固定されている (0)、いろいろな人種の人が暮らしている (+)、田舎は日本とは違い、草原という感じで牛や馬がたくさんいた (0)、フルーツは皮ごと食べる (0)、とにかく広い (+)
F (12/15)	感涙した自分に驚いた (+)、緊張 (+)、心配 (+)、6年間英語を勉強してきたのに、全然話せなかった自分 (-)、自分の消極的なところを改めて確認 (-)、迷い (+)、向上心 (+)、日本の家のありがたさ (0)	助け (研修中、ずっと皆さんに助けられたから) (+)、出会い (ホストファミリー、先輩、先生方) (+)、英語の大切さ (+)	新鮮 (+)
G (6/7)		家族の大切さ (+)、友達の大切さ (+)、家族仲良し (+)、フレンドリーな人たち (+)	人や食べ物がすべて大きい (0)、アメリカの食事は高カロリー (-)
H (5/10)	度胸がついた (+)、視野が広がった (+)、成長できた (+)	ホストファミリーの人たちがいい人だった (+)、友達が増えた (+)	
計	27 項目	34 項目	18 項目

注：左欄のアルファベットは各協力者を示し、分数表記の分母はカード数、分子は佐伯の概念に分類することができた枚数を示す。尚、(+)、(-)、(0) は協力者がカード内容に対して示したイメージを指す。

分析の結果、佐伯の概念に適用することができたカードは、全カード中の 87.8 パーセント (79 枚) であった。表にあるように、「自分探しの旅」に関連した内容は 34.2 パーセント (27 枚)、「共同体としての学び」については 43.0 パーセント (34 枚)、「社

会的自我の形成」については22.8パーセント（18枚）となり、「共同体としての学び」が顕著に見られた。協力者個々人の結果に着目すると、「自分探しの旅」に関連するカードが最多であった者は2名、「共同体としての学び」に関連するカードが最多であった者は3名、「社会的自我の形成」に関連するカードが最多であった者は1名、「自分探しの旅」と「共同体としての学び」の数が同数、または、「自分探しの旅」と「社会的自我の形成」の数が同数であった者が各1名であった。全体の人数が少数ではあるものの、この結果は、先の結果と合わせて考察すると、「共同体としての学び」が今回の調査協力者の主要な学びとなったことが示唆されている。また、カードの内容に対して抱いたイメージについては、プラスイメージが66枚（83.5%）、マイナスイメージが7枚（8.9%）、ゼロが6枚（7.6%）となり、調査協力者たちが研修に対して非常に肯定的な感情をもっていたことが明らかになった⁶。

7. 協力者の「個」としての「学び」の様相

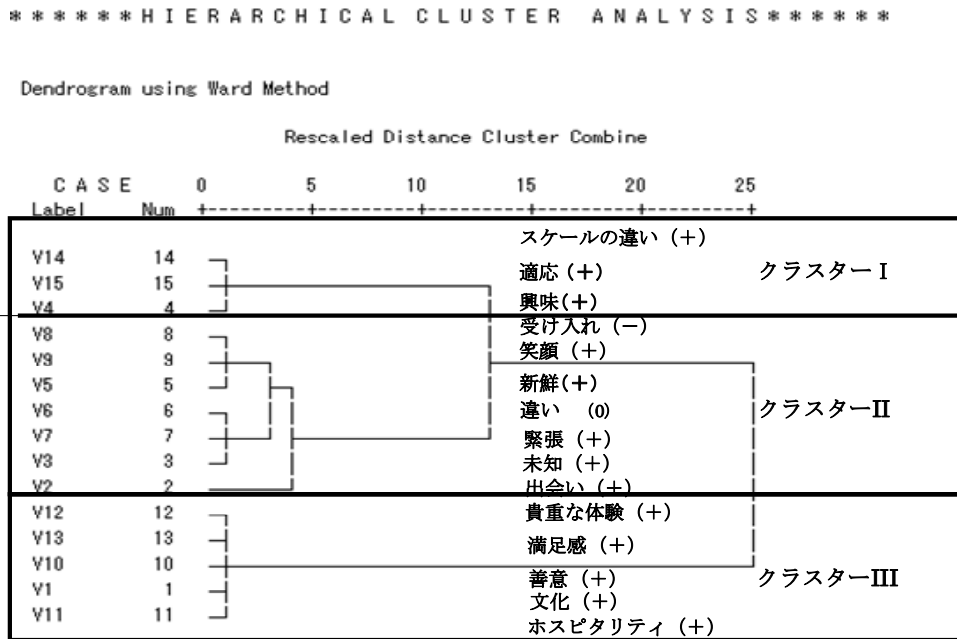
ここでは、紙幅の都合上、一貫して積極的参加の姿勢を示した参加者Aと出発前までは消極的参加であった参加者Bの結果を分析することにより、彼らに生じた学びの様相をより詳細に探索したい。

7-1 調査協力者Aによるクラスターの解釈

Aは研修当時2回生であり、過去2回、家族と海外旅行をした経験があったが、個人で海外生活をした経験は今回が初めてであった。研修の参加目的は、英語力を向上させたいことと、時期的に就職活動などの障害がなく海外に行くことができる唯一の機会であったからである。インタビューの結果、図1に示されたように、15項目からなる3つのクラスターが出現した。

クラスター1は「スケールの違い」、「適応」、「興味」の3項目から構成されている。この部分は、Aにとって「アメリカ文化そのもの」を示していた。Aによると、「文化のスケールが日本と違っていて、違うからこそ適応しないといけない、そして、それが興味深い」とのことであった。研修に参加する前は、日本や自分の周りだけでAの世界は構成されていたが、アメリカに行ったことで、異なった世界があることを発見したという。「適応」について、当初は日本では許されてもアメリカでは誤解を招く行為など、無意識におかしてしまうかもしれない誤解に対して不安を感じていたが、現地入りした後は次第に新しい生活にも溶け込めたという。「興味」に関しては、違う世界、知らない世界を見てみたいという好奇心、とにかく、自分が知らないことを知ってみたいという思いがあったという。

図1 参加者A



クラスター2は「受け入れ」から「出会い」までの7項目から構成されており、この部分は、「渡米後に感じたこと」で構成されていた。「受け入れ」については、アメリカ文化の生活様式全般を受け入れたことを示している。具体的には、言葉の違いの存在は当然であるため、英語だけでホストファミリーとコミュニケーションをとる努力をし、シャワーだけで生活するといったアメリカ式のライフスタイルに従った。「緊張」は、渡米直前まで続き、現地研修開始後も常に感じていた。研修で出会ったメンバーも含め、見るもの、会う人すべてが「未知」であり「新鮮」であった。クラスター2の「違い」は、クラスター1であげられた日本とアメリカの違いではなく、アメリカ文化内における家庭のあり方の多様性を示していた。通常、参加学生は研修を通して1つの家庭に滞在したが、Aの場合、ホストファミリーの都合により、2つの家庭に滞在することになった。彼が滞在したホストファミリーは、日本とアメリカとの文化差に匹敵するほど、生活様式の異なる家庭であり、この体験によってAが同一文化内にも多様性が存在することに気づいたという。また、現地の人たちとの交流を通じて、文化が異なっても共通のものとして、「笑顔」があることを悟ったのだった。

最後のクラスターは「貴重な体験」から「ホスピタリティ」までの5項目で、これらは「帰国後にアメリカに対して感じたこと」である。研修中は貴重な体験の連続であり、満足度の高い内容であった。シアトルへのフィールドトリップでイチローを見ることを研修目的の1つにあげていた参加者も多く、Aもその1人であったが、帰国後、振り返ればそれは大した出来事ではなく、アメリカで生活した3週間すべてが満足そのものであったという。その原因となったのは、現地の人々の「善意」と「ホスピタリティ」の精神であり、これらを提供してくれたのはお世話になった2つのホストファミリーであった。彼らとの交流を通じて、あらためて、文化の違いは国単位によるものだけではないことにAは気づいたのだった。

7-2 筆者の総合的解釈

ここでは、上記の結果から、クラスター1を「旅立ち前のアメリカに対する思い」、クラスター2を「異文化受容」、クラスター3を「文化差の理解に対する再構築」と命名する。図1が示すように、クラスター2の「受け入れ（-）」と「違い（0）」以外はすべてプラスのイメージであり、Aが今回の体験を非常に肯定的イメージで捉えていたことが示されている。Aによると、「受け入れ」がマイナスイメージであった理由として、この言葉から連想されるのは「義務感」であったという。最初は、アメリカ生活のすべてを受け入れなければいけないという義務感を感じていたが、もう少し、柔軟に行動してもよかったという思いがあった。「違い」がゼロのイメージであるのは、違いとは辞書的な意味ではマイナスイメージがあるが、Aの場合は、その違いから様々なことを学べたことで、プラスとなり、相殺してゼロになったとのことであった。

Aは、渡米前のアンケートの質問項目の1つであった「研修に期待すること」について、「米国のライフスタイルと考え方を学ぶこと」と書き、「研修に対する姿勢」については、「全てを受け入れる」と回答していたが、インタビューの結果からも現地研修の中でこれらを実践したことがうかがえた。インタビューした8名の中で、異文化コミュニケーションの視点からは、彼が最も大きな学びを獲得したと筆者は感じたが、その理由はこのような違いも含めてアメリカ生活における全てを受け入れるという異文化受容の姿勢が、インタビューの際の発言に幾度か垣間見られたからである。研修における彼の最大の学びは文化差について再考し、文化がもつ概念を再構築し理解するに至ったことである。以下はAの発言内容である。

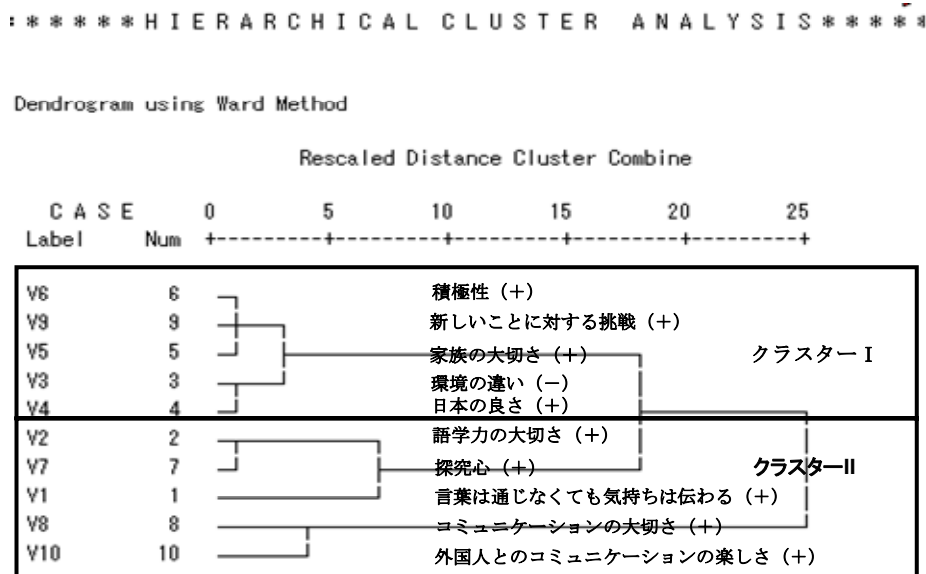
「やっぱり、何国やからというわけじゃなくて、考え方とかは、少しずつ、あの、家庭によっても違ってきてるかなと。ま、もっと言うたら、個人によって違ってきてるかなと思います。おっきいもんとして、どここの人やから、みたいなんで変わってくるのは、食生活とかその言語だけで、考え方とかは個人、個人によって違ってくるんだと思います。同じ国でも家庭が違えば違うし、同じ家庭でも、やっぱり、懐いてきてくれる人もおれば、ちょっと、フンって感じの人もおれば、やっぱり、人によりけりかなと。個々人が文化かなと。」

この発言は、単に文化の多様性への理解を示しているだけではなく、特定の文化に対する文化的ステレオタイプを見直すことの重要性を示唆している。

7-3 調査協力者Bによるクラスターの解釈

一方、Bは母親の強い勧めにより研修参加を決めた一人であった。彼女は研修当時3回生で、過去に海外経験はなかった。事前研修のアンケートでBが書いた参加の目的は、英語力の向上と海外ホームステイに対する興味であった。インタビューの結果、10項目からなる2つのクラスターが出現した（図2）。

図2 参加者B



クラスター1は「積極性」から「日本の良さ」までの5項目で、これらは日頃、「自分が置かれている環境」に関連した事柄とのことだった。「積極性」に関しては、主に、現地研修での語学の授業について、日本とは違い、自分が少しでも疑問に思ったことは、たとえ完璧な英語でなくても、積極的に手をあげて質問をしたという。これは、「新しいことに対する挑戦」とも関係しており、道で見知らぬ人に自ら「ハロー」と挨拶する自分がいた。さらに、彼女にとって研修は積極性を培う場となったとともに、「家族の大切さ」と「日本の良さ」を再発見する機会も与えていた。以下のBの発言がこのことを示唆している。

「えーと、ずっと実家暮らしなんで、いつも家には親がいて、ご飯の時間になったらご飯が出てくるっていう生活で、自分が思ってることも、バンバン親に言ったりしてたんですけど、実際、親がいなくなると、家族がいなくなると、(中略)なんか、自分の中にたまっていることを聞いてもらえたということとか、家族としゃべっていること、しゃべっている時間とかが、結構大事やなと思って。(中略)聞いてもらっている時間がすごい大切なんだなって。」

また、Bは「環境の違い」を感じる状況におかれたことで、交通の便、食べ物、言葉などの点で不自由のない日本の良さを実感したが、それは決してアメリカを否定してのことではなく、日本を離れることで、それまで自分がいた環境に感謝する思いを抱いたとのことであった。

クラスター2は「語学力の大切さ」から「外国人とのコミュニケーションの楽しさ」までの5項目で、これらは全体的に「コミュニケーションの重要性」が軸になっている。ここでは、特に、語学力の大切さを実感したという。人間関係の中で、相手を知りたいという強い探究心をもたなければ、知っていく喜びを味わえない。一方、たとえ探究心があったとしても、言葉が通じなければ、聞きたいことも聞けず、相手が伝えてくれようとしていることも伝わってこない。同時に、現地では、語学力が不十分でも、誠実に相手に伝えようと努力すれば気持ちが伝わることを実感し、それが、現

地の人たちと積極的にコミュニケーションする楽しみへと変わっていったという。さらに、ここでBが指摘した「コミュニケーションの大切さ」についてはアメリカで出会った人たちだけを指しているのではなく、研修仲間を含む自分の周りのすべての人々との関わりの中でのコミュニケーションの重要性を意味していた。

7-4 筆者の総合的解釈

上記の結果から、クラスター1を「自文化への思いと新たなる旅立ち」、クラスター2を「コミュニケーションの重要性への気づき」と命名する。図2が示すように、クラスター1の「環境の違い」はマイナスイメージであったが、それ以外の項目はすべてプラスのイメージであり、A同様、Bも研修について大きな肯定的感をもっていたことがわかる。「環境の違い」がマイナスとなった理由について、「自分がこれまで住みなれていた所とは違う場所に行ったとき、最初は住みにくさを感じる」という意味で、マイナスとのことだった。

Bはもともと、母親の強い勧めで研修への参加を決意した消極派であった。第2外国語としてフランス語を履修し、入学当初よりフランス語研修への参加を母親から強く勧められていたが、本人は乗り気ではなく、クラブ活動との兼ね合いもあり、3回生になるまで渡航を引き伸ばしていた。そんな折、友人が米国研修に参加することを知り、ようやく重い腰をあげたのだった。そんな彼女だが、インタビュー時には、既に翌年の夏休みに再びホストファミリーを訪れる計画を立てており、自分自身に起きた気持ちの変化に本人も驚いている様子であった。

このような変化を彼女にもたらした理由の1つとして、まず、滞米中に本人に積極性や探究心が芽生えたことがあげられる。それは、2つのクラスター全体に対するイメージを、Bが「積極性」と「自分から動くことの大切さ」と表現したことからもうかがえる。また、彼女にこのような変化をもたらしたもう1つの原因として、ホストファミリーとの交流があった。以下は、Bの発言である。

「全然知らない、言葉も通じない知らない人だったのに、私をすごい大事にしてくれて、私ももちろん、向こうを理解しようとしてたけど、向こうも私の言うことにすごい耳を傾けて理解する努力を見せてくれたんで、本当に最後は、もう1つの家族やないけど、それぐらい思えるぐらい深い関係になったんじゃないかなと。」

インタビューの結果から、Bの場合、日本の家族への思いを含め、渡米するまで自分が過ごしてきた環境に対する感謝の気持ちを抱けたこと、そして、ホストファミリーとの交流を通してコミュニケーションの重要性に気づいたことが、彼女に情動の変化のみならず、態度変容と行動変容をもたらし、海外研修に対するマイナスイメージを払拭する大きな原動力となったと解釈することができた。

8. 結びにかえて—短期海外研修プログラムにおける学びと長期留学に対する期待

本稿では、PAC分析を用いて、2007年度に流通科学大学が実施した米国短期海外研修プログラムの参加者にどのような学びが生じたのかを、佐伯胖の「学び」の概念である「自分探しの旅」、「共同体としての学び」、「社会的自我の形成」という鍵概念を基に検討した。調査対象が参加者全員に至らなかったものの、短期海外研修プログ

ラムが調査協力者に「共同体としての学び」を中心とした様々な学びをもたらしたことが明らかになった。

短期海外研修プログラムの場合、期間の短さのために、文化的認知を含む深い段階での認知の獲得や異文化適応にまで至らない、あるいは大学主催の研修では参加者にとって真の意味で自立した学びはもたらされないのではないかという懸念はある。本稿では、佐伯が指摘した「社会的自我の形成」を文化的認知に関わるカテゴリーと捉えたが、アドラー (Adler, 1975) は、異文化との初期の接触では、文化的差異に興味を持つが、文化の深い違いは認識されないと指摘している。今回の調査では、同一文化内の「家族」というサブカルチャーの存在に気づき、文化差の再構築を遂げた参加者 A を除き、全体のカード内容の分析からはアドラーが指摘した文化の深層に関わる内容に対する認知はほとんど見られなかった。

他方、8名の調査協力者が記入したカード内容の80パーセント以上がプラスイメージとなり、彼らが帰国後、研修に対して肯定的感情をもっていたことが示された。異文化接触の初期は、ハネムーン期とも呼ばれ、現地での経験すべてがよく見えてしまうことが多い (Adler, 1975)。3週間という短期間の滞在であったために、今回の研修参加者もちょうどその時期にあったと言えるのかもしれない。もう少し滞在期間が長ければ、滞在文化や人々に対する否定的側面にも気づき、それに応じて否定的感情というものが生じた可能性は否めない。

しかしながら、筆者は、異文化理解や文化的認知の獲得だけが大学主催の海外研修の目的ではないと考えている。大学主催の短期海外研修では、仲間や指導教員、ホストファミリーや現地の人たちなど、研修に関わるすべての人たちとの交流の中で、共同体としての学びの喜びを体験することも何ものにもかえがたい重要な学びであると考えられる。当初は参加することに消極的な態度でいた参加者 B が、ホームステイの人たちはもちろんのこと、研修仲間や現地の人たちとの交流を通じて、家族の大切さやコミュニケーションの重要性に気づき、自らの行動を変容させたことはその好例である。そして、このような経験が、異文化体験そのものとは、また、違った意味で研修の参加者にとってさらなる学びとなり、将来、日常生活において新たな視点や態度あるいは行動を獲得するきっかけとなると思われる。

「自分探しの旅」、「社会的自我の形成」に関連する学びについては、むしろ、長期留学が果たす役割に期待するところが大きい。足立 (2010) は、留学から得られる成果・効果の1つとして、人間的成長をあげ、Chickering and Reisser (1993) の Student Development Theory (学生の成長理論) を留学をした学生のケースに援用し、以下の7つの領域における成長について考察している：(1) 能力開発、(2) 感情制御、(3) 自律を通して達成する自立、(4) 成熟した対人関係の確立、(5) アイデンティティの確立、(6) 目的の確立、(7) 人格・価値観の統合。ここで、佐伯が指摘した「自分探しの旅」、「社会的自我の形成」は、これらすべてに関連した学びである。筆者は、日本学生支援機構が提供する留学支援制度により、2010年3月から2011年2月までの1年間、米国西海岸の大学に留学した学生を対象に、「留学」、「自分自身」、「日本・日本人」、「アメリカ・アメリカ人」という4つのキーワードに対するイメージの変化を、留学前、留学中、帰国後の3度に渡って PAC 分析を用いた調査を実施し、その結果、学生が特に上記の(3)～(7)の領域に関する成長を遂げたことを明らかにし

た⁷。

箕浦（1998）は、海外に赴くことは「個々人の内面の一部となった自国の意味空間を持ったまま、異文化の物理的・生態的・社会的環境に入り、そこに充満している意味世界に晒されること」であると指摘している（p. 131）。外国に自らの身を置くことによって、自文化の視点から異文化に対する理解を深めると同時に、異文化の視点から自文化を客観的に見る機会が与えられる。滞在期間の長短に関わらず、日本の外に出て、自分自身が「外国人」として扱われる経験は人生の貴重な体験であるだけでなく、異なった視点で物事を見る可能性を知ることは、異文化理解のみならず、若者たちが近い将来社会人として、長きに渡る人生を歩んでいくうえでも有効なことであろう。海外研修や留学の意義や教育的効果については、様々な視点から検討する必要があるが、今後とも、益々多くの希望あふれる若者たちが、海外に羽ばたくことを期待するとともに、彼らの実りある学びと成長の一助となるべく、今後とも努力していきたい。

引用文献

- Adler, P. (1975). "The transitional experience: An alternative view of culture shock", *Journal of Humanistic Psychology*, 15 (4), pp. 13-23.
- Chickering, A. & Reisser, L. (1993). *Education and Identity*. San Francisco: Josey-Bass.
- Wight, R. A. (1995). "The critical incident as a training tool" In S. M. Fowler and M. G. Mumford (Eds.), *Intercultural Sourcebook: Cross-cultural training methods*. pp. 127-140. Yarmouth, MA, Intercultural Press. Inc.
- 足立恭則(2010)「大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」『人文・社会科学論集』東洋英和女学院大学 28号、77-91頁。
- 木村啓子(2011)「短期海外研修プログラムの効果と役割」『ウェブマガジン「留学交流」』2011年12月号。<http://www.jasso.go.jp/about/documents/keikokimura.pdf> (2012年7月14日閲覧)
- 工藤和宏(2011)「短期海外研修プログラムの教育的効果とは一再考と提言」『ウェブマガジン「留学交流」』2011年12月号。
<http://www.jasso.go.jp/about/documents/kazuhirokudo.pdf> (2012年7月14日閲覧)
- 佐伯胖(1995)『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店
- 内藤哲雄 『PAC分析実施法入門 「個」を科学する新技法への招待』(ナカニシヤ出版, 2001)
- 日米教育委員会(2012)「アメリカ留学の基礎知識(大学・大学院)」
<http://www.fulbright.jp/study/res/t1-college03.html> (2012年7月14日閲覧)
- 箕浦康子「異文化体験と人間形成」『国際化時代の教育(岩波講座 現代の教育第11巻)』(岩波書店, 1998)
- 横田雅弘、白土悟、坪井健、太田浩、工藤和宏(2006)『岐路に立つ日本の大学—全国4年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告』(文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)平成15-17年度調査最終報告書 2006)

注

- 1 本稿は、筆者が執筆した「短期語学研修における参加者の気づき—異文化理解教育の観点から—」(流通科学大学出版会, 2009, vol. 21 (2), pp. 37-60.) の中で筆者が実施した研究調査にデータを追加し、異なる観点から結果を分析し、論じたものである。
- 2 2007年度当時は、卒業単位として認められる4単位の全学フリーゾーン科目として位置づけられていたが、2011年度から開始された新カリキュラムからは、2単位科目となり、事前研修と現地研修とから構成されている。
- 3 クリティカル・インシデントとは、異文化の人々との相互作用や異文化適応のプロセスにおいて、人々が経験する困難や困惑、フラストレーションを引き起こす葛藤場面が描かれたシナリオを読み、異文化の違いや異文化間の問題への対処法を探索する目的で使用する異文化訓練のためのツールである(Wight, 1995)。
- 4 PAC分析法は、自由連想を利用して個人内のイメージや態度の構造を測定し、診断・分析するために開発された研究法であり、被験者自身のイメージや態度を被験者自身の言葉で表現させ、またそれらの言葉をクラスター構造として外在化し、距離をおいて評定させることができるため、研究者の主観やスキーマに基づいた判断に影響されずに、被験者の内的世界を描き出すことができる方法である(内藤, 2001)。
- 5 佐伯(1995)は、「しっかりと通用する『社会的な』他者を自分の中に形成し、客観的に認識しつつ、あらゆる吟味や批判に耐えるように反省することができるようになる」段階の自我を「社会的自我」と位置づけており、「この段階で、人は自らを社会的かつ公共的な集団の一員と見なし、自分たちが歴史ある独自の制度のもとに置かれていることを認識し、その中で存在する権利や義務を自覚し、それらを改善する可能性を探ることになる。」と指摘している。これに従い、ここでは(3)の内容を「社会的自我」として分類した。
- 6 PAC分析の中で、協力者が自分の書いたカード内容に対して、プラス、ゼロ、マイナスのいずれかのイメージを報告する手続きがある。
- 7 現在執筆中の論文における調査結果である。